

# ウィリアム・ジェームズにおける自然主義の問題

## William James's Criticism of Naturalism

林 研

Ken HAYASHI

大阪経済法科大学 21世紀社会総合研究センター 客員研究員

### 目次

- I. はじめに
- II. 宗教と科学と自然主義
- III. 超自然主義とプラグマティズム
- IV. おわりに

キーワード：自然主義・超自然主義・宗教と科学・プラグマティズム・科学的方法

### I. はじめに

宗教と科学は対立関係にあるとしばしば言われる。しかしそれは喧伝された一種の先入見であり、実際にはその関係は多様かつ複雑である。それゆえ近年では様々な分析や類型化の試みが行われてきているが、その際ひとつ問題となるのは、「宗教と科学」と言うとき、「宗教」は何を指し、「科学」は何を指すのかという基本的な理解である。これを一義的に決定することは実際のところ不可能なのだが、逆に、例えば「科学」という言葉がもつ総合的なイメージを要素に分けて考察することは、宗教との関係を見る上でも有益と思われる。

ところで、ウィリアム・ジェームズ (William James, 1842-1910) は、『宗教的経験の諸相』<sup>1</sup> (以下、『諸相』と略記) において、「科学と宗教はどちらも、それぞれそれぞれを実際に使える人にとって世界の宝庫を開くための真の鍵である」(VRE 116) と述べるように、宗教と科学のどちらをも信頼する哲学者であった。つまりジェームズにおいては、宗教と科学は対立していない。

その一方で『諸相』には、世界を物理的・機械的に見る見方が宗教と対立的に示され、批判される場面が多く見られる。これは、一見科学批判に見えるが、批判の矛先はある種のもの見方なのである。つまりジェームズは、科学そのものは信頼しつつ、科学と類縁関係にある「自然主義」を批判している。ジェームズにおいては、宗教と対立するのは科学ではなく、自然主義だということである。このように、「宗教と科学」の議論において自然主義の位置は重要な論点のひとつになる。

「自然主義」という語は文脈によって様々な意味を持つが、本稿で述べる自然主義は「超自然主義」の対義語としてのものである。宗教における超自然主義とは、神的な力が現象世界の出来事に介入することを認める立場を言う。こうした介入は普通、物理法則と矛盾をきたすものと考えられ、宗教と科学の関係を論じる際の対立点とされることが多い。そのため、科学との調和を目指す近現代の宗教論は自然主義的な形を取りがちである。しかしジェイムズは、『諸相』の「後記」で、自身を「超自然主義者」と表現する。もちろんその超自然主義は決して通俗的なものではないが、ジェイムズは明確に自然主義に対抗する立場を取っていると言える。

一方で、ジェイムズは言うまでもなく、プラグマティズムの成立と普及に大いに貢献した哲学者である。プラグマティズムは、それ自体としては宗教には中立的な立場であり、多くのプラグマティストは自然主義的な宗教観を持っている。しかしジェイムズは、プラグマティズムの紹介においていつも宗教に関する主題を用いており、ジェイムズの超自然的な宗教観はプラグマティズムにも強く関わっていると考えられる。

本稿はこうした背景をもとに、ジェイムズの思想に深く入り込んでいる、自然主義の問題を検討するものである。前半では「自然主義」に注目してジェイムズの宗教論を読み直すことで、ジェイムズが宗教と科学を調和的に捉えた構造を明らかにする。後半では、古典的プラグマティズムの成立という思想史的な出来事に超自然的な宗教観がどのように関与しているかを確認する。

## Ⅱ. 宗教と科学と自然主義

### 1. 自然主義

「自然主義 (naturalism)」、あるいは「科学的自然主義 (scientific naturalism)」という語は、自然的なもののみを基盤とした世界の捉え方のことを指し、本稿では特に「超自然主義 (supernaturalism)」の対義語として捉える。いわゆる「科学」は事実上自然科学のことであり、自然科学は自然界の原理を探究する学問であるから、自然主義が科学と密接な関係を持つことは間違いない。しかし、自然主義は「主義」であって、自然科学の結果をただ受け入れることとは異なる。いまだ研究されていない事象に関しても「こうあるべきだ」とするある種の規範性を持っている。

その自然主義にも、実際にはいくつものヴァリエーションが存在し、いわばハードなものからソフトなものまでかなりの幅がある。これについて神学者デイヴィッド・R・グリフィンは、「自然主義」が多義的であることを指摘した上で分類を行っている。彼はその両端に当たる立場を示し、超自然的な介入の否定のみを意味するものを「ミニマルな」意味での自然主義と呼び、感覚主義・無神論・唯物論・決定論・還元主義をすべて含むものを「マキシマルな」意味での自然主義と呼んだ<sup>2</sup>。

マキシマルなものともて言わずとも、自然主義が無神論や唯物論を含むヴァージョンである場合、これは宗教と相容れず対立の構図を取るであろう。しかしミニマルな自然主義は、世界のものごとの運行が自然のメカニズムに従うという意味にすぎない。これは一見唯物論に近いものの、必ずしも神的存在を否定しない。ただ、自然界の外部からの力が出発事に介入することをのみ否定するのである。したがって、ミニマルな意味であれば、自然主義は宗教と決定的に対立するものではない。実際、グリフィンの属するプロセス神学の立場では神を自然の内部における参与者と捉えるため、外部からの介入を想定しない。

こうしたことからグリフィンが、宗教側が超自然主義を放棄し、科学側がマキシマルな自然主義を捨てること、その結果両者がミニマルな自然主義を共有することによって、宗教と科学の調和が可能だと考える<sup>3</sup>。

## 2. ジェイムズと自然主義

ではジェイムズの立場はどうであろうか。『諸相』の著述は、事実として観察された宗教的経験のみを材料として組み立てられており、全体として科学的な手法を前面に出している。とりわけ心理学的な回心解釈などは一見自然主義的ですからある。しかし、前述のように「後記」において、ジェイムズは自身を「超自然主義者」に分類するのである。これは、グリフィンの言うミニマルな自然主義にすら属さないということであろうか。

もしすべての思想家を自然主義者と超自然主義者に区分するならば、私は疑いなく、たいいていの哲学者たちとともに、超自然主義の部門に入らなければならないだろう。しかし超自然主義にも、より粗野なもの、より精練されたものがある……理想的なものとの交流において新しい力が世界に入ってきて、新しい出発がここ地上でなされる、と私が信じる以上、私は断片型またはより粗野な型の超自然主義者の内に分類されざるをえないと思う。(VRE 464-5)

ジェイムズの言う「より精練された」超自然主義とは観念論的な立場を指すとされており、非物質的な実在を重視するものの、それが現象界に因果的に働くことは否定する。これは超自然主義とはいってもむしろグリフィンの言うミニマルな自然主義に近いであろう。しかしジェイムズ自身は理想的なものの干渉を認めているため、自然主義の立場からさらに隔たったところにいる。

では、ジェイムズが超自然主義の側にスタンスをとるのはなぜだろうか。これには主に二つの理由が考えられる。

第一に、ジェイムズは自然主義の提示する世界観に恐怖と言えほどの抵抗を示す。このことがジェイムズの宗教分析に大きく影響していることは多くの研究者が指摘するとこ

ろである<sup>4</sup>。例えば『諸相』に次のような記述がみられる。

血が凍るような寒さと薄暗がり、すべての永遠の意味の不在——純粋な自然主義や現代の通俗科学的進化論にとっては、それが究極的に目に映るすべてである……近年の宇宙論的推測を得た自然主義にとっては、人類は、越え出る逃げ道のない絶壁に囲まれた、凍った湖の上に住んでいる人々に似た状況にある。だが彼らは、氷が少しずつ融けていることを、氷の最後の薄膜が消滅し、不名誉な溺死が人類の運命となる、その避けられない日が次第に近づきつつあることを知っているのである。(VRE 133)

つまり、宇宙を物理学だけで解釈し、遠い先の未来を考えると、最後にはすべてが無となった状態が推測されるのであって、今われわれが営んでいるすべての活動が終局的には無意味に帰してしまう、というのである。

このことはもちろん、自然主義を否定する論拠にはならない。しかしこのヴィジョンは、自然主義か超自然主義か、という哲学的問題が実際的な結果を異なったものにする重大な論点であることを示している。ジェイムズは、プラグマティズムを世に広めた1898年のパークレーにおける講演「哲学的概念と実際的結果」<sup>5</sup>において、上記と同様の未来像を語ったのち、対比的に次のように述べる。

神の観念は、機械論的哲学において大変流行しているような数学的観念に比べてどれほど明瞭さで劣るとしても、それに比べて少なくとも、永久に保たれるべき理想的秩序を保証するという実際的な優位を持っている……永遠の道徳的秩序に対するこの要求は、私たちの心のもっとも深い要求のひとつである。そして、ダンテやワーズワスのように、このような秩序の確信に基づいて生きる詩人たちは、その詩の心を奮い立たせ慰める並外れた力を、この事実を負っている。そしてここに、唯物論と有神論の本当の意味が、こうした異なる感情的および実際的な訴えの内に、希望や期待への私たちの具体的態度のこうした調整と、その差異が引き起こすすべての繊細な帰結との内にある。(PCPR 1087)

ジェイムズのプラグマティズムの立場からすれば、人が何を信じるかということは、その人生に実際的な影響を及ぼす。未来に希望を持てるヴィジョンは、人間の活動を活性化し、世界の可能性を広げる結果となって表れる。つまり、自然主義的な世界解釈は、より希望的な解釈よりも、その効果において劣るという見方もできるのである<sup>6</sup>。

しかし「理想的秩序」などに根拠はあるのか、と問われるかもしれない。信念の有効性で選ぶなら何を信じてよいのか、という批判もあるだろう。だが、一方の自然主義も根拠の十分な信念とは言えないのである。ジェイムズは論文集『信じる意志』<sup>7</sup>で自身の科学観を断片的に著しているのだが、例えば「私たちの科学は一滴、私たちの無知は

海」(WB 496) と言うように、科学によって知られていることは宇宙全体から見ればごくわずかであると考えている。宇宙の一部を説明する物理学ですべてを説明してしまうのは拡大解釈なのである。人間が現時点で認知している世界の枠外に、人間には理解できない別の秩序があるという考えは、必ずしも非合理的ではない。そしてジェイムズはその具体例を宗教的経験の内に見る。

### 3. 回心の分析と「より以上のもの」

ジェイムズが超自然主義を自認することになった第二の理由は、回心を中心とする宗教的経験の解釈にある。ジェイムズは基本的に回心を、潜在意識的領域で育っていった宗教的観念が「意識の場」の中に突発的に侵入するというモデルで説明する。こうした分析は回心の自然的な解釈の試みとも言えるのだが、具体的なケースを多く検討するなかで、ジェイムズは自然的解釈の限界を知ったようである。

別の方法では説明がつかない、すべての侵略的な意識の変化を、識閥下の記憶の緊張が爆発点に達した結果と解釈するのは「科学的」である。しかし、意識内への突入のなかには、長い期間潜在意識的に潜伏していたことを簡単には示せないようなものが時折あることを、私は率直に告白せざるをえない……〔そうした結果は、聖パウロの場合のような〕有益で合理的な場合には、より神秘的または神学的な仮説に帰せられるべきであろう。(VRE 218*n*)

回心現象にみられる二つの大きな特徴は、新しい興奮が発現しエネルギーが解放されること、自己意識の再方向づけがなされることである。ジェイムズは、このエネルギー（すなわち「力」）と方向づけ（すなわち「意味」）の両方を自然的に説明することができないと考えた。潜在意識下の記憶は意味の説明にはなるが、意識内への突入力は説明できない。逆に、生理学的な反応という力の説明は、回心が強烈な意味を伴うことを説明できないのである<sup>8</sup>。

その結果、ジェイムズのモデルでは、潜在意識領域の「向こう側」が未決定の状態に置かれ、そこに「より以上のもの (the 'more')」が想定されることになる。ジェイムズの解釈によれば、「回心」や「祈り」の状態において、「より以上のもの」との交流がなされることが宗教的経験である。「より以上のもの」はいわゆる「神」のような実在とは限らないが、「自分自身のより高い部分」と「隣接し連続している」ものであり、「彼の外部の宇宙で働いているもの」であるとされている (VRE 454)。つまり、宗教的経験のメカニズムを説明する仮説として、外部の力の介入がもっとも合理的だとジェイムズは結論したのである。ジェイムズにとってはこの交流体験こそが宗教の核心であるため、宗教を肯定するためには、超自然主義を認めることが必要となる。

#### 4. ジェイムズの超自然主義と科学

ジェイムズは以上のように自然主義を否定する立場をとるが、その一方で科学に対しては大きな信頼を寄せている。では、彼の超自然主義と科学との間に矛盾はないのであろうか。

まず、ジェイムズにとって、科学は「方法」であるということが挙げられる。

科学は、その本質においてとりあげられる場合、ひとつの方法をのみ意味するものであり、いかなる特別な信念をも意味しないはずである。しかし、その信奉者たちによって習慣的にとりあげられるように、科学はある固定された一般的信念として認定されるようになってきた。その信念とは、自然のより深い秩序はまったく機械的であるというものである。<sup>9</sup>

つまり自然主義はここで言う「特別な信念」のひとつであって、それは科学の本質ではないというわけである。むしろ、科学的な方法によって信念を形成していくと考える場合、検証を怠って自然主義を盲信することは科学的な態度ではないということもできる。

では、超自然的な力の介入を信じることは科学的でありえるだろうか。すでに判明している物理現象に反する意見を言うならそれは非科学的であるが、判明していない領域に関しては、仮説は自由である。少なくともジェイムズの場合、力の介入は意識世界・精神世界に限られているため、物理法則を乱すような事態は考えられていない。したがって、「超自然主義」と言いながらも、ジェイムズの主張するのは、あくまでも科学が示す結論と矛盾しない領域に限定された超自然主義である。

もちろん、意識世界を物理世界と切り離すことが妥当か、という問題はある。自然主義が考えるように意識現象が脳機能に還元できるならば、意識世界も物理世界の延長上にあることになるからである。確かに近年、脳科学から宗教体験を研究しようとする動きが活発になってきており、その結果、宗教体験の際に生じる脳内の変化が検出できるようになっている。しかし、「ある体験に脳内の変化が確認される」ことは、「その体験に脳の変化が伴う」ことの言い換えにすぎない<sup>10</sup>。よく言われるように、相関関係は因果関係を意味しないのであるから、体験を脳の変化に還元することはできない。その宗教体験の源泉が神的存在であるかどうかという問いは、科学が否定することも肯定することもできない主張なのである<sup>11</sup>。したがって、ジェイムズの想定する神的な介入も、現時点では科学の枠内で語ることでできない問題であり、それゆえに科学と衝突してはいない。少なくとも論理的には超自然主義は非合理ではないのである。

このようにジェイムズは、証明はできないが否定もできない超自然主義を仮説として主張する。これはジェイムズにとって根本的な世界観であり、ジェイムズ哲学のあらゆる場面に影響している。次章では、プラグマティズムと超自然主義の関係を考察する。

### Ⅲ. 超自然主義とプラグマティズム

#### 1. 心理的効果と有用性

ジェイムズは先述のバークレー講演「哲学的概念と実際的結果」で、初めて彼の解釈によるプラグマティズムを発表した。したがって、この講演にはジェイムズ独自の発想が最も端的に表れていると考えられる。プラグマティズムは1870年代にチャールズ・サンダース・パース (Charles Sanders Peirce, 1839-1914) が構想した考え方であるが、ジェイムズはこれを20年以上心中に温めており、パースが想定していた厳密な、言い換えれば狭いプラグマティズムの適用範囲を大きく押し広げて提示したのである。特に、心理学者であったジェイムズは人間心理の差異が人間行動の差異につながり、現実を違ったものにするというヴィジョンを大胆に組み込んでいる<sup>12</sup>。まずこのことから確認していこう。

この講演でまず提示されるプラグマティズムの意味は以下のようなものである。

二つの異なる哲学的な定義、もしくは命題、もしくは主義といったようなものがあり、その二つは互いに矛盾しているように見え、人々が議論しているものだと仮定しよう。もし一方の真理を仮定することによって、他方の真理を仮定した場合に予測することとは異なるような、いかなる時、いかなる場所でも、誰にとっても考える実際的帰結を予測することができないのであれば、そのとき二つの命題間の差異はまったく差異ではない。それは見せかけの、言葉上の差異でしかなく、更なる論議には値しない。(PCPR 1081)

この記述は、「観念を明晰にする方法」<sup>13</sup>としてのパースの原理を大枠で踏襲している。観念から導かれる帰結として何が生じるか、それが観念の本当の意味だというわけである。しかしジェイムズの独自性は、このプロセスのなかに、人がその観念をどう感じるか、という要素を含めることにある。ジェイムズはバークレー講演で、過去の方を見る「回顧的な」見方と未来の方を見る「前望的な」見方を対比させた上で、帰結の差異を見る前望的な見方において、プラグマティズムの適用の仕方を明らかにしようとする。ここで例示される「二つの異なる哲学的な定義、もしくは命題」が有神論と唯物論である。

有神論と唯物論は、回顧的に理解されるならばさして違いがないのだが、前望的に理解すると、まったく異なる実際的な帰結を、正反対の経験の眺望を指し示す。というのも、機械的進化論によれば、私たちの有機組織がかつて生みだしてくれたすべての良き時間と、私たちの精神が今形作っているすべての理想は、確かに物質と運動を再分配する諸法則のおかげなのだが、その諸法則は間違いなく必然的に自身の仕事を元に戻し、いったん進化させたすべてのものを再び分解してしまうからである。

そしてこの後に、神の観念は理想的秩序を保証するという、II章に引用した記述がある。

つまり、有神論か唯物論かという議論の論点は、それを心に抱くことで引き起こされる心理的な状態をもとにした行動の差異、その行動による現実の差異によって明らかになるというわけである。

ところで、ここで言われる「有神論」は、超自然主義的な立場が想定されていると言える。その理由は二つある。第一に、唯物論の悲観的な未来像の記述はII章で確認したように「自然主義」を主語に同様のことが語られているからである。したがってそれに対立する有神論の立場は超自然主義を意味することになる。

また第二に、このパークレー講演ではこの後「神の属性」についてのプラグマティックな見解が述べられており、「全知をもって神は闇の中で私たちを見て、正義をもってその神が見るものに報いまた罰する」という点が「生きた実際的な事柄」として評価されている（PCPR 1090）ことから超自然的な見解が前提であることがわかる。

つまり、第一に未来を破滅から救ってくれる神、第二には行為に報いをもたらししてくれる神、すなわち現象世界に介入する神を信じてこそ、有神論は人間の行動を賦活させてくれるということである。もちろん、この型の有神論は一般論として語られているのであって、ジェイムズ自身がそのままこの立場であるわけではない。しかしそういう大枠での有神論に十分な意義があるという主張は読み取りうる。その正当化の理論としてプラグマティズムが用いられているのであり、この論証は人間心理の機微を構造の内に含むことによって成立している。

また、ここでは有神論と唯物論のどちらが優れているかには言及されず、中立の立場が取られているが、破滅の未来を思い描いて意気消沈して生きることと、未来に希望をもって活発に生きることとを比較すれば、そこに暗示されている優劣は明らかである。するとここには、どちらの説がより良い人生をもたらすか、という基準が持ち込まれていると見ることができる。この講演の時点で、プラグマティズムは真理論として述べられてはいないが、この有神論の例は、後にはっきり主張されることになる「有用性」概念に結びついていると考えられる。

プラグマティズムにおける有用性という基準の解釈は議論の多いところであるが、本稿では深入りしない<sup>14</sup>。ただ、そもそもこの発想が超自然的な神を信じることの効用という具体例にひとつの起源を持っているということは、以上の検討から明らかであろう。

## 2. 個別性と多元性

プラグマティズムの理解について、もうひとつジェイムズ特有の強調点がある。それは、観念は特定の具体的経験によって計られねばならないということである。ジェイムズ

は次のように言う。

いかなる哲学的命題であれ、その事実上の意味は、常に私たちの未来の実際的経験、その経験が能動的であろうと受動的であろうと、その中で何らかの特定の帰結にたどり着きうる。このとき肝心な点は、その経験が能動的でなければならないという事実よりもむしろ、その経験が特定のものでなければならないという事実にある。(PCPR 1080)

プラグマティズムは観念を具体的行動に結びつける考え方だが、その行動が受動的なものも含み、しかも普遍的ではなく個別的なものを指す点はジェイムズ流プラグマティズムの特徴である。そして、特定の経験とは、私やあなたといった特定の個人が得るパーソナルなものである。

哲学の全機能は、世界についてのこの定式表現かあの定式表現かのどちらかが真である場合、私たちの人生の特定の場面でああなたがたと私にいかなる特定の違いが生じるであろうかを見出すことであるべきである。(PCPR 1081)

つまり、自分の人生の問題として具体的に扱うときにこそ、観念の本当の意味が現れるというのである<sup>15</sup>。このように、「観念に基づく行動の結果」というパースのコンセプトを、具体的な個人の特定の場面というシチュエーションで考えるジェイムズの理解は、多分に彼の宗教理解に起源を持つように思われる<sup>16</sup>。

『諸相』は、宗教を個人的な宗教的経験から解釈した点で画期的な著作であったが、その一人一人の経験を大切に扱うなかで、ジェイムズの視点も徹底的に個人に定位している。この著作におけるジェイムズの「経験論」は、他の著作と比べてもとりわけ個人主義的な形で表明されている。

私たちのそれぞれが、運命の車輪の上を転がっていくのを個人的に感じる時、自分に特有の宿命の危機についていただく他人には共有され得ない感じは、自己中心的なために貶されるかもしれないし、非科学的とってあざ笑われるかもしれない。しかし、この感じはまさに私たちの具体的現実の基準を満たすひとつのものであって、こうした感じを欠いたまま存在者たろうとするものやその同類は、半分しか出来あがっていない実在の欠片であろう。(VRE 447)

したがって、ジェイムズにとっては、具体的な個人一人一人が救われるような宗教理論が見出される必要があった。例えば法則的に洗練された万人救済論的な神の観念は、「小売りする神ではなく卸売りする神」(VRE 441)であり、ジェイムズには採用されない。

『諸相』の結論部では、あらゆる宗教に見られる特徴として「不安感とその解決」が挙げられている。その不安感は「私たちに何か間違ったところがあるという感覚」、解決は、「より高い力と正しく結びつくことによって、私たちがこの間違いから救われているという感覚」であると言う（VRE 454）。この「結びつき」は、意識を受け容れの状態に開くという意味での「祈り」によってもたらされる。つまりジェイムズによれば、神的なものとの意識の交流によって個人が救われるということが、宗教の機能として決定的に重要なのである。

祈りに応じて救われるという現象は、救済の力が普遍的にではなく個別に働くことを意味する。つまりジェイムズに言わせれば神は「小売りする神」であり、こうした神観は必然的に力の「介入」つまりは超自然主義を要請する。この神観は自然主義の立場からは受け入れられないだろう。しかし、個人的な要求に応じてくれる神を信じることは、心理的作用としてはより大きな効果をもたらすはずである。したがって、プラグマティズムは個別の救済論を肯定的に受け入れる。

そして、個別性を考慮することは、真理の多元性へと繋がる。個々の宗教的経験は様々なパターンで表れるわけだが、それをジェイムズは積極的に認めて、「神的なものは単一の性質を意味することはありえない」（VRE 437）と断言する。それぞれの個人との関係において、応答する神もまた様々な姿を持つというのである。

多元性もまた、ジェイムズのプラグマティズムにおける大きな特徴であるが、これは宗教現象だけに限らず、一人一人の経験に密着して世界を解釈する以上、必然的に伴う態度と言える。こうした個人的な視点は『プラグマティズム』<sup>17</sup>でも各所に表れている<sup>18</sup>。プラグマティズムが「人生の具体的な部分との接触」（PR 494）を保つものとみなされる以上、それは全体として多元的な真理論に至るのである。

私たちの説く真理は、多元的な真理、導きの諸過程であり、状況のうちに実現されていて、報いてくれるという特質だけしか共有しない真理である。（PR 581）

こうして、ジェイムズのプラグマティズムは私的な宗教的経験を担保する。そしてそれは、個人に応答する超自然的な宗教観を可能なものとして認めることをも含んでいる。

### 3. 「理想的秩序」とその真理性

これまで確認してきた通り、ジェイムズは超自然的な宗教観を持っているが、その超自然主義は物理法則に抵触するものではない。神的な存在もまた、実体的な神としてではなく「理想的秩序」あるいは「見えない秩序」などの表現で抽象的に示唆される<sup>19</sup>。

宗教生活は、見えない秩序が存在しているという信念、そして、私たちの最高の善は

その秩序に私たちが調和的に適応することにあるという信念から成る。(VRE 55)

ジェイムズの超自然主義はこの「理想的秩序」を認めるものであり、この秩序を証明はできないまでも、少なくともその妥当性を示すのが、彼の宗教思想上の課題であったと言える。したがって、プラグマティズムの論理はここにも関連していることが予想される。

ではまず、ジェイムズがこの「秩序」をどのようなものと考えていたのかを確認してこう。このヴィジョンを説明するのに、ジェイムズは好んでペットのたとえ話を用いる。

私はむしろ、宇宙全体に対する私たちの関係は、私たちの犬や猫といったペットの人間生活全体に対する関係と同じであると信じている。犬や猫は私たちの画室や書斎に住んでいる。彼らは、その意義については何も感づくことなく、その情景の一部をなしている。彼らは歴史の曲線の単なる直線区間である。この曲線の始めや終わりや形態は彼らの認知を全く越えている。そして私たちも事物のより広大な生命の直線区間なのである。(PR 619)

つまりジェイムズは、犬や猫の視点から見た世界像が誤りではないように、われわれが捉える物理法則の世界もそっくりそのまま肯定した上で、それを包含するより高次の秩序がこの世界に重なって存在していると考えerわけである。この考えは少なくとも非合理的ではない。それが彼のいわゆる「超自然主義」である。

ジェイムズの哲学に一貫して流れるモチーフとして、知性や科学では捉えきれない経験の豊かさを重視する姿勢がある。そうした視点から見ると、自然主義は、既に知られていることによって世界を規定し、その全体像を矮小化するもの見方だということになる。これは彼の合理論批判とも共通している。

現在の合理論の楽観主義も、事実を愛する精神には、やはり浅いように思われる。現実の宇宙は広く開かれたものであるが、合理論は体系を作る。そして体系は閉じられていなければならないのである。(PR 498)

合理論や自然主義で説明しきれないような事象は突発的に現実のなかに現れるのであり、閉鎖系の知はそれを無視するがゆえに正当ではない、とジェイムズは考えるのである。

では、自然的世界の外に何かがあるとして、それはどのようにして捉えればよいだろうか。心理学的な主題においては、意識の外部に「潜在意識的領域」が、状況証拠から認められる。これと同様に、現象世界の外により広い領域を想定することは可能である。その場合の状況証拠が宗教的経験なのである。

しかしもちろん、宗教的経験は再現性や状況の統制性が低く、普通に考えて科学的な意

味での証拠にはなりえない。それでもジェイムズは経験論者であるから、知的操作ではなく経験的な方法による検証を求める。その方法として有力と言えるのがプラグマティズムなのである。

様々な宗教的経験に共通する事実として、ジェイムズは「信仰状態や祈りの状態におけるエネルギーの実際的な流入」(VRE 463)を見出した。こうした流入は、その経験をした当人のその後の行動を大きく変える。したがって、より高い力との交流がなされるとき、その力の存在はプラグマティックに認められる。

この問題の目に見えない領域は単に理想的なものではない。というのも、それはこの世界のなかに効果を生み出すからである……他の実在のなかに効果を生み出すものは、それ自身一つの実在と呼ばなければならない。(VRE 460-461)

その交流が妄想にすぎないのではないか、と疑うことはできる。しかし、「理想的秩序」の仮説は、宗教的経験という現実的な現象を説明する、少なくとも可能な説である。言い換えれば、現象世界の出来事を説明する枠の中に、「理想的秩序」は特に問題なく有効に入り込める。すなわちこの説は、『プラグマティズム』で述べられる経験どうしの「満足な関係」、つまり経験の整合性という基準を取るならば、真理としての資格を得る。

観念が真となるのは、この観念が、私たちが私たちの経験の他の部分と満足な関係に入るのを助けてくれる限りにおいてである。(PR 512)

そしてプラグマティズムの真理観によれば、経験の整合性は常に検証され続け、検証されていることはその都度真理が生成していることである。「理想的秩序」はひとつの仮説として、それが有効である限り動的な意味での真理性を持つ、というのがプラグマティズムからの回答と言えらるだろう。

#### IV. おわりに

現代においては、宗教研究も基本的には自然主義に従って進められるのが常であり、自然界の外部からの介入を認めるジェイムズの見解に賛同できる人は多くないであろう。現代の知識人であれば「超自然主義」という立場を受け入れるには抵抗があつて然るべきである。しかし、宗教と科学の調和を目指す上で自然主義をベースにするのは、一般の信仰者にとっては困難なことである。宗教の伝統的理解を変更することは、学問的に可能でも信仰の現場に適用することは簡単ではない。

その点ジェイムズの主張は、宗教が持つ理想的秩序の希求と宗教的経験による救いを理

論的に保証しており、宗教の身近さを十分に保っている。このことにより、救済を求める素朴な信仰も科学との共存が可能になる。そしてこの際、力の介入が意識世界に限られており、少なくとも現在の科学と衝突することなく両立する。「宗教と科学」の仲介理論として、科学的知識と衝突しない超自然主義は現代でもひとつのオプションたりえる可能性を持つのではないだろうか。

プラグマティズムにおける有用性という基準は、超自然的な神を信じることがより良い結果をもたらすという具体例にひとつの起源を持っていた。また、ジェームズの多元的な真理観は、個別的な救済現象を可能にするという意味で、超自然的な宗教観とかわりを持つ。そして、ジェームズの超自然主義を表現する「理想的秩序」は、整合性の検証という経験的方法によって真理性を付与され得ることになる。

このように、プラグマティズムがジェームズ流に構築されるなかで、超自然主義は直接・間接に様々な影響をもたらしている。超自然主義を棄却してもプラグマティズムは成り立つものであるが、ジェームズの超自然的な視点がなければプラグマティズムの歴史的な発展・展開はなかったかもしれない。

ジェームズの超自然主義への志向は、霊的なものへの憧れから来るというよりは、知性で捕捉できるものへの物足りなさから来ているように見える。限られた知の領域を根拠に閉じた体系を作ることへの批判は、自然主義への批判ともなる。ジェームズは常に未知の可能性を考慮に入れて宇宙を解釈する。その際、プラグマティズムの論理は有効なツールとして機能していると言えるだろう。

---

## 注

- <sup>1</sup> William James, *The Varieties of Religious Experience*, 1902. (VRE) *Writings 1902-1910*, The Library of America, 1988. 主なジェームズの著作に関しては、上記著作集のものをテキストに用い、引用・参照部には略号とページ数を示した。引用文の翻訳は筆者による。〔〕内は筆者による補足である。
- <sup>2</sup> David Ray Griffin, *Religion and Scientific Naturalism*, State University of New York Press, 2000, p.11.
- <sup>3</sup> Ibid., p.17.
- <sup>4</sup> Wayne Proudfoot, "Pragmatism and 'an Unseen Order' in *Varieties*," *William James and a Science of Religions*, Columbia University Press, 2004, p.31, p.33.
- <sup>5</sup> "Philosophical Conceptions and Practical Results," 1898. (PCPR) *Writings 1878-1899*, The Library of America, 1992, p.1087. 引用文は、「哲学的概念と実際の結果」林研 他共訳、『哲学論集』第59号、18～41頁、大谷大学哲学会、2013年による。
- <sup>6</sup> ただし、この時点で真理性は決定されない。ジェームズのプラグマティズムによれば、どちらの信念が真理なのかは、その信念を持って生きる人々の人生を含む長い検証の結果によって判定されることになる。

- <sup>7</sup> William James, *The Will to Believe*, 1895. (WB) *Writings 1902-1910*.
- <sup>8</sup> Proudfoot, op. cit., p.39.
- <sup>9</sup> “Address of President before the Society for Psychical Research,” 1896, *The Works of William James : Essays in Psychical Research*, Harvard University Press, 1986, P.134.
- <sup>10</sup> 杉岡良彦「脳科学や精神科学からみた宗教体験とその意味」『脳科学は宗教を解明できるか?』芦名定道、星川啓慈編、春秋社、2012年、92-93頁。
- <sup>11</sup> 同書、96頁。
- <sup>12</sup> この発想自体は『信じる意志』（1897）所収の諸論文において既に表明されているが、「プラグマティズム」として表現されたわけではなかった。
- <sup>13</sup> ジェームズがプラグマティズムの典拠としていつも提示するのはパースの論文 “How to Make Our Ideas Clear”, *Popular Science Monthly*, Vol.12, pp. 286-302, 1878であり、その主題が「観念を明晰にする方法」であることがわかる。
- <sup>14</sup> 有用性概念についての筆者の見解については、拙稿「プラグマティズムと科学・宗教——ウィリアム・ジェームズの真理観」、『大谷学報』、第93巻第1号、1～19頁、大谷学会、2013年 を参照されたい。
- <sup>15</sup> 他の例として、以下のような記述もある。「宇宙を一と呼ぶ際に、「一」によってどんな確かな事柄を実際に意味しているかが、あなたがたが問わなければならない第一の問題である。どのような方法でなら、唯一性があなたがた自身の個人的生活に痛切に感じられるだろうか」（PCPR 1093）。
- <sup>16</sup> 前節の有神論の問題にしても、それが個人の人生に直接影響するという点がジェームズの立論の中心にある。「もしこの特定の〔個人の具体的な宗教的〕経験の神が誤りならば、あなたがたがこうした経験の上に自分の生活を営むひとりである場合、それはあなたがたにとって恐ろしいことである。有神論の論争は、私たちがそれを単に学問的で神学的に扱う場合まったく些細なものだが、私たちがそれを現実の生活への結果によってテストする場合、とてつもなく重要な意義をもつのである」（PCPR 1091）。
- <sup>17</sup> William James, *Pragmatism*, 1907. (PR) *Writings 1902-1910*.
- <sup>18</sup> 「プラグマティズムは何でも喜んで取り上げ、論理にも感覚にも従い、最も卑近で最も個人的な経験をも考慮しようとする」（PR 522）。
- <sup>19</sup> Proudfoot, op. cit.